

カンボジア人日本語教師の抱える問題を明らかにし、 解決に向けて一緒に考えようプロジェクト

細井駿吾（東京国際大学）

1. はじめに

カンボジアでは、日本語人材不足をはじめ、様々な課題があると言われている。実際、一部のカンボジア人日本語学習者（以下、学生）は、大学や日本語学校在学中に他の教育機関で日本語教師（以下、教師）として働くことがある。その結果、教育経験が浅いまま教えることになり、日本語の指導方法に関して悩みを抱えることがある。また、日本での生活経験や渡航経験がない教師も多く、日本の文化やルールについて自信を持って教えられないという声も聞かれる。さらに、カンボジアでは、学生の育った環境や受けてきた教育が大きく異なるため、教師はそうした違いにも対応する必要がある。

このようなカンボジアの日本語教育の現状を踏まえ、本活動では、カンボジア人日本語教師（以下、カンボジア人教師）が抱える具体的な悩みや問題を明らかにし、それらの問題について一緒に考えることで、解決の糸口を探ることを目的とする。そのため、カンボジアの首都プノンペンを訪れ、日本語教育機関での活動を実施した。

2. 活動について

2-1 活動の概要

本活動は、2024 年 7 月 24 日から 8 月 25 日にわたって実施した。主な活動は以下の 4 つである。1 つ目はインタビュー調査で、カンボジア人教師を対象に、日本語教育の現場での悩みや問題について聞き取りを行った。2 つ目は日本語の授業に参加し、学生の様子や教師の教授法を観察した。3 つ目は、学生との交流および教師との情報交換である。4 つ目は、書店における日本語学習のための教材の取り扱いに関する調査を実施した。

また活動を円滑に進めるため、渡航前だけでなく、現地に到着後も活動中の日程調整のため

に継続的に連絡を取り合った。実際に、カンボジアでは急に祝日が決定されることがあり、その影響で予定の変更を余儀なくされることがあった。さらに、教師の都合によりインタビュー調査の実施日を変更する必要性が生じることもあった。そのため、常に迅速に連絡を取れる体制を整えておくことで、突発的な変更にも冷静に対応できたと考えられる。

2-2 調査協力機関について

本活動は、多くの機関の協力のもと実施することができた。協力機関は、王立プノンペン大学、カンボジア日本技術大学、カンボジア日本希望協会、カンボジア日本人材開発センター、カンボジアメコン大学、ケイケイカンボジア日本語学校、国際交流基金プノンペン連絡事務所、さくら幼稚園、名古屋大学日本法教育研究センター、BELTEI 国際学校、KEN 日本語技能学校の 11 機関である。

3. 活動の報告

3-1 インタビュー調査の概要と結果

カンボジア人教師 14 名に対してインタビューを実施した。その結果、主に 3 つの側面で悩みや問題を抱えていることが明らかになった。1 つ目は、教師自身のキャリアに関することで、将来の進路に対する不安や留学・転職に関する悩みを抱えていることが分かった。2 つ目は、学生に関することで、学生の授業態度の改善や学習意欲の向上が難しく、日本語の運用能力がなかなか伸びないことが課題として挙げられた。3 つ目は、授業に関することで、適切な指導法を見つけることや発音指導の難しさに直面している教師が多いということが明らかになった。

インタビュー実施後、得られた結果を基に、オンラインツール「Padlet」を活用し、教師同士が

意見交換を行う機会を設けた。図1は、「ルールについて説明しても、守らない人がある」という悩みに対し、他の教師が自身の解決策を共有したり、共感のコメントを書き込んだりする様子を示している。この活動の結果、他の教師の取り組みやアドバイスを共有することができ、こうした交流の場が教師同士のネットワーク形成につながる可能性があることが示唆された。

ルールについて説明しても、守らない人がある。

♡ 0

🗨 9

文法、語彙などをよく勉強したのに、学生はなかなか言葉が出ません。

4ヶ月前

遅刻したりする学生が多かった。

4ヶ月前

なぜルールを守らなきゃいけない事をまだちゃんと伝わってなくて、やらないでくださいだけですと人は恐らくついてこないのです。

元々性格で決まったルールを守れる言葉が難しいので、何回も指導しても、続けます。

カンボジアの認識と日本の認識が大きいからです。

賛成しています。

守らない理由を聞いて、何回も指導します

5ヶ月前

賛成します。

3ヶ月前

そうですね。

図1 Padlet における意見交換の様子

3-2 日本語授業の参与観察

日本語の授業で、学生の様子や教師の教授法を観察した。カンボジア人教師は、明るく元気に指導することが多く、自身の学習経験を共有しながら授業を進めている点が印象的であり、カンボジア人教師と学生は心理的な距離が近いように感じられた。さらに、日本の文化や生活に関する情報を授業に取り入れる工夫も見られた。

次に、学生については、日本語の発音に苦労している様子も見られた。また、文法に関しては、日本語では異なる文法であっても、カンボジアの公用語であるクメール語に訳すと同じ意味になってしまう場合があり、その点で理解に苦労して

いる学生もいた。さらに、学生の背景は多様であり、他の大学に通っている学生や、社会人として働きながら学ぶ学生もいた。



図2 日本語の授業の様子

3-3 学生との交流・教師との情報交換

学生との交流では、学生に日本語の難しさについて尋ねたところ、漢字が難しいと感じているという声が多く聞かれた。一方で、アニメを視聴するなど、日本の文化に親しみながら学習を進めている学生もいた。ケイケイ日本語学校で開催された夏祭りイベントに筆者も参加し、学生たちも楽しみながらイベントに参加していた。



図3 夏祭りイベントの様子

カンボジア人教師や日本人教師との情報交換の中で、カンボジアにおける日本語の人気の低迷していることが挙げられた。その背景の一つとして、中国語など他の外国語の人気の高まっていることが考えられる。筆者も現地を移動する際、多くの中国語の看板を目にする機会があった。一方で、幼児教育や初等教育の現場で

は、日本の文化やマナーを取り入れた教育が注目を集めているという話も聞かれた。また、アニメなどのポップカルチャーに関心を持つカンボジア人が増えているそうで、街中では、日本のアニメキャラクターのグッズが販売されているのを目にした。

3-4 日本語学習教材等の調査

プノンペンにおいて、日本語学習のための教材（以下、日本語教材）の調査を行った。プノンペンで日本語教材を取り扱っている書店として、イオンモール内の紀伊国屋書店、PEACE BOOK CENTER、INTERNATIONAL BOOK CENTER、POPULAR STATIONERY AND BOOK SHOP が挙げられる。その他の書店にも足を運んだが、教材を取り扱っている書店は限られており、英語やクメール語で書かれている一般的な書籍のみを扱う書店も多かった。まず、紀伊国屋書店は、日本で販売されている日本語教材も取り扱っていた。しかし、クメール語に翻訳されたものは、『みんなの日本語（スリーエーネットワーク）』以外にはなく、多くは英語版であった。販売されている日本語教材には、『初級日本語げんき（ジャパントイズ出版）』『まるごと（三修社）』『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE（日本語教育振興協会）』『中級から学ぶ日本語（研究社）』などの教科書や読解や聴解などの技能別の日本語能力試験の対策本や日本語能力試験の模擬試験問題集もあった。

また、日本語教材の他に、日本文化の関連書籍として、日本の漫画も販売されており、日本語版だけでなく英語版も並んでいた。さらに、アニメ関連のグッズも販売されていた。その他の日本語

教材を扱っている書店では、初級レベルの日本語の会話集を中心に17冊を確認することができた。しかし、これらの多くは、出版年や執筆者（翻訳者）の情報が不明確であった。今回の調査で、初級レベルのものは確認できたが、中級や上級者向けのものはほとんど見当たらなかった。

4. まとめと今後に向けて

本稿は、「カンボジア人日本語教師が抱える問題を明らかにし、解決に向けて一緒に考えようプロジェクト」というテーマに基づき、実施した活動について報告した。実際に、プノンペンの教育機関を訪問し、活動を実施することで、多くのことを学べた。本活動を通じて明らかになった課題として、以下の点が挙げられる。第一に、教師同士の交流が促進できるような継続的に交流できるようプラットフォームを作成することが必要であると考えられる。第二に、カンボジア人向けの日本語教材の開発が必要である。書店での調査からも、中級や上級レベルの日本語教材はほとんど流通していないため、カンボジア人のための日本語教材の開発を検討する必要があると思われる。

また、本活動を通じて、多くの貴重な人脈を築くことができた。一方で、カンボジアの日本語教育のさらなる発展には、カンボジアの実情に即した支援を継続することが重要であることも改めて認識した。

なお、本稿で報告した成果は、現時点でまとめた途中報告であるため、今後は本活動で得られたデータをもとに、さらに分析を進め、考察を深めることが課題である。

謝辞

本活動に快く協力して下さった各教育機関、先生方、学生の皆様、そして関係者の皆様に感謝申し上げます。